
この世界で引き金を引いた

コニ・タン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この世界で引き金を引いた

【Zコード】

N8168C

【作者名】

コニー・タン

【あらすじ】

くすみません、連載停止中です>恋愛小説を一度も書いた事の無い素人が贈る、10話以内予定の中編ラブコメ?小説。情報泥棒兼高校生の吉田隆也と、その同級生、水野華の恋愛?話を書くつもりです。

プロローグ（前書き）

ジャンルが思いつかないので「学園」にしましたがあんまり学園じやなかつたりします、「JT」承ぐだぞー。

プロローグ

「おー！居たか！？」

「いや、もしかして木戸屋外へ・・・」

「そんなはずは無い！よく探せ！」

お勤めの苦労さん、でもあんたらの探し方、全然荒すぎるよ。柱の影の俺一人見つけられないなんて警備員として失格だ。ま、それなりに気配も消してんだけどさ。

「くそつー...ビニだ？」

「もつこの凶画には居ないんじゃないのか？」

「むう・・・、3階に行つてみるとするか・・・」

はい、俺の勝ち。

賞品は要らないよ、もう貰つてるから。
じゃ、さよなら。

「終わったか」

さつきのビルから出た俺に、突然声がかかる。
まあ驚かない、こんな時にいきなり声かけるやつなんて一人しか居ない。

「へいへい、御所望の品は」さうありますで、「せこまよへつと

「ならとつとと貸せ、お前が持つてると危なつかしくある」

俺が持つているのはメモリーなんぢやうつて言つなんか小さいやつ。
機械のことによく分からん、仕掛けたり回収したりは俺の仕事だが
作つたり読んだりはここつの仕事だ。

「こいつ、「お前」、これが目の前の人物と俺の呼び名、仕事以
外でこいつに会うわけでもないし、仕事の時は俺とここの二人つ
きりになる、名称は必要なかつた。

「今日は家で仕事をするからお前も帰つていいで」

「家でするほどするほどでけえ仕事かよ？」

「いや、ただの気分だが」

心底不思議そつに俺の顔を覗き込む、「そんな」と理由は要るの
か?」と。

もちろん要らないさ、俺が規律に厳しい現在社会に毒されてるだけ
ですよ。

「じゃあ、まあ、帰ることにするか

「早く帰つて早く寝る事をオススメするよ

こんな夜遅くに呼び出しているのは自分なのにシレつと言こやがる。
これ以上居ても不快な気分になるだけなので俺は帰路につく。

夜風が少し、身に染みた。

「つゅーや、りゅーや、つゅーやる」

うるさい、耳元で喋るな、勝手に誰の迷惑にもならない所に行きやがれ、あの世とか。

パンが詰まつた口では喋れないの、せめて心で罵倒しておく。

俺の名前は吉田 隆也、^{よしだ じゅうや} 基本的にじく一般的な男子高校生だ。んで、こっちが水野 華、^{みずの はな} 基本的にじく変態的な女子高生だ。

「あ、失礼な事考えた」

「ふあんふあえふえふあい（かんがえてない）」

「え、愛してる? やだなあ昼間つからあ」

「こいつの耳はどうなつているのか、宇宙の真理なんかより俄然知りたい。」

「だ・れ・が! んな事いつか! とひとと自分の席に戻つて食え!」

今はくだらない授業と退屈な授業の間に設けられた至福の昼食タイム、こいつなんかに邪魔されていいはずが無い、断じて、決して、何があるつと。

「いやいや、自分の席に戻るのはいいのですがね、ちょっとおもひでちょうどだいな」

来た、来たよ、いつものパターンが！

「いや、俺今日、金あんま……」「皆様へ、隆也は財布に札た。……」「うわっ、馬鹿やめろー！」

「お~」

「…………つん」

俺は「こいつに弱みを握られている。

ところのもまず俺の副業から紹介しなければならない。

昼は普通の学生、そして夜の俺の姿は！なんと泥棒なのだ！

…………うん、かつこ悪いよね、スペイとかの方がよかつた？

とりあえず一年ほど前「あいつ」からメールが着て、「儲かる仕事、欲しいですか？」と来たもんだ。

詐欺っぽかったけどその時は本気で金に困ってたからなあ……。その仕事というのが偉いさんやどつかの社長の「弱味」を「盗む」というものだ。

盗聴やら隠し撮りとかそういうのをして、売ったり斬したりして金を稼ぐらしい。

駄目な仕事だよな？俺もそう思つ、青い服着た正義の公務員に見つかったら即収容だ。

でもまあ、流されやすいのが俺の性分でして。

しかも俺にはこの犯罪じみた仕事が合っているらしい、1年間誰にも見つからず仕事をしてきた訳だし「あいつ」も善良にやつてる分は盗らない。

「不正に得た金」しか盗らないのだ、何の理念か知らないがそれのおかげで罪悪感も半減だ。

で、話を戻そう。

初めての仕事の時、正確な金額は言わないが「かなり」の大金が報酬として手に入った。

それだけあれば卒業まで慎ましく暮らせるのだが、そこは悲しいかな貧乏学生。

ちょっとね、大量にね、お金を使っちゃったわけですよ。

それを水野に見られてたかられているのだ、おいらないとみんなにばらされる。
うちのクラスの連中は強欲・散財・遠慮無しと有名で、俺が金持つてる事を知れば多分、臓器も残らない見事の使いっぷりを披露してくれるだろう。

弱味泥棒が弱み握られてどうすんだ、って思つけど仕方ないものは仕方ない、

かくして、俺はこの少女にたかられて過ごしているのだった…

「いやー、ヤキソバパン考えた奴はすごいですねー、これ当時はゲテモノの部類だよ、多分」

「お前の一存でヤキソバパンをゲテモノにするな。和食とジュースの組み合わせの方が胸悪くなるわ」

学食で白米 + 味噌汁 + 焼き魚の黄金コンボ、「A定食」とオレンジジュー
スをおごらせるこいつに失望した。

さうに言つと俺のヤキンバパンを横取りしてゲテモノ呼ぱわりする
こいつに絶望した。

「怒るな、少年！報酬として明日はホールドして差し上げよー。」

「うわーい

「オイこいつ、何だその嫌悪と投げやりな喜びを足して2で割ったよ
うな返事は？」

「的確に的を射てるな、その通りだ」

「死ね！」

箸を俺に向かつて突き刺そつとする水野、そしてそれを容易く避け
る俺、伊達に修羅場はぐぐつてないぜ。
と思つていたらそれはフェイクで本命は脛蹴りすね！

完全に意識が上に向いていた俺は机の下の攻撃に反応できず、クリ
ーンヒット。

「ぐ・・・お・・・・！」

脛を押さえつづくまる俺、余談だがこいつは陸上部員だ、脚力が
半端じゃねえ・・・。

「はん！私の誘いを断るなど2年早いわ！」

「くそっ・・・・卒業までめえのいいなりか・・・！」

俺が恨めしげに見つめると謝罪0%の瞳で見つめる水野。

周囲はそれを見て「また夫婦漫才か」とか言って去っていく、ちょっと待てどっちかと言つと「鎖を放さない飼い主と飼い犬」って感じだぞ。

・・・・・悔しいが俺は飼い犬で、繰り返し言つが悔しいし失言だ、頭の中に自分が「飼われている」イメージがあつたのが嫌で、かぶりを振り忘れようとする俺。

さらにそれを見て思いつきり見下げながら爆笑する水野、てめえのせいだコンチクショー。

まあ、こんな感じに、俺の学園生活は平和だった。

1話（後書き）

- ・一応本格的に始まりましたがなんだかラブコメになつていらない気が・
- ・とりあえずまともなものが書けるように頑張ります。

2話（前書き）

モチベ下がりないうちに連続投稿です。

「つたぐーーー一日連続で仕事つてビビリこいつだよー。」

もはや見慣れた相棒に抗議する、いつも仕事は一週間は絶対空けるはずだ。

「儲けの良さそいつな所が良いタイミングだつたんだ、報酬は弾むぞ？」

「ぐ・・・・・・」

水野のせいで俺、金欠。結局こいつからも言ひなりかよ・・・・・

「5割増し、いや2倍は払えよ・・・・・」

俺が言ひと、こいつはこいやかに指を3本立てた。

美味しい話には裏がある、予想以上に面倒くさい仕事なんだらうなあ・・・・・

結論から言わせてもらひと、ものすごい辛かった。

警備員の数がいつも2倍はいるし、防犯設備もほぼ完璧。

俺の武勇伝で大作スパイアクション映画が作れそうだがそれは別的话として

「はあー、終わつたぞー」

体がだるい、睡眠を求めて唸つてゐる。

俺みたいに「仕掛け」だけで物は盗らないから出来たが、普通の泥棒さんなら絶対無理だろ？。

弱味泥棒の利点その1、何も盗らないから多少痕跡を残しても「不思議」つてだけで終わる、

その2、物は盗らないからいくらでも身軽に動ける、
その3、正確に「何かありそうな時」を狙うから盗聴器なども長く仕掛ける必要は無い、等等・・・

まあなにが言いたいかといふと、今回は大分やばかったといふ事だ、本当にギリギリで高揚感を感じるぐらい。

「（）苦勞様だ、前の報酬

こいつは俺をねぎらいながら、極厚封筒を投げて渡す。

報酬として明日はテーートして差し上げよー。

受け取つた瞬間、水野の言葉が頭をよぎる。

（明日は・・・・・ちょっと贅沢しようかな）

ガラにも無くそんなことを思つて、俺は帰宅した。

* * * * *

俺は待つてゐる、ひたすら待つてゐる、この駅前で、人が多くて疲れる位置で、ずっと！

「やほーい！」

「遅い！今何時だと思つてゐる！そして待ち合わせは何時だと思つてゐる？」

「待ち合わせは午後1時、現時刻は2時半であります、少佐！」

「わかつてんなら早よ來い、大ボケ二等兵が…………ってあれ、他のやつらは？」

いつもは水野の周りに2・3人くつついているのだが、今日は一人だけのようだ。

「ちーちゃんも天崎も今日に限つて予定入つてゐる『テスヨ、残念残念』名前を出されてもさうぱり分からぬが、肩をすくめた水野に同意の領きを返しておぐ。

「で、どこ行く？」

「どこ行つても俺がおこりられるだけなのが。

「うへん、とりあえず！昼飯～！」

食つてなかつたのか今2時だぞ、とか言つ事は言わないでおぐ、どうせ無料で済ませたかっただけだ。

ひょい、ぱく、もぐもぐ、ひょい、ぱく、もぐもぐ、ひょい……

・・・・・

「・・・・・何か喋りなよ」

俺たちは昼食をハンバーガーショップでとることにした。

水野様がファーストフード店では破格の値段となる物と量をお頼みになられましたのでワタクシメはおとなしくフライドポテトで過ごしている次第であります。

ひょい、ぱぐ、もぐもぐ、ひょい、ぱぐ、もぐもぐ、ひょい・・・
・・・・・

無言の抵抗といつやつだ、少佐と一等兵の立場は逆転したが、地味な方法で弱者の恐怖を思い知らせてやるわフハハハハ。

「・・・・・何か喋つてよお」

水野の目が「命令」から「懇願」に変化、ちょっとビデキリ。

水野は、外見だけならかなり可愛い。

目つきはきつめだがOK、全体的に見ると調和が取れてる。体つきを見るとウエストは細く、胸は・・・

「何見てんの?」

すいません、割愛。

綺麗な髪は肩にかかる程度のセミロング、俺としては直球好みだ。正直に言おう、こうなる前は「俺の校内付き合いたい女子ランキン グ」でトップ3だった。

だからまあ・・・・・一人きりは少しばかり嬉しいわけで・・・・・。ちょっとだけだよ！？それも外見的に！客観的に見てね、他人から見るどぞう見えるかとか・・・・・

「ていー！」

「ぐわやあー」

俺の思考は、水野の伝家の宝刀、脛キックにより中断をせられた。

「何すんだこの野郎！」

「ずっと黙つてるからでしょ！あと私「野郎」じゃないわよー！」

「はいはい、細かいね！　「何すんだこのアマ」、はいこれでいいですかお嬢様！」

ギヤアギヤア喚く俺たちは最早この店では名物のよつなものだ、常連の客は生暖かい目でこちらを見つめている。

「じやあお前は・・・・・・・・・・・・・・

「弱み握られてるくせに・・・・・・・・・

俺たちの口論は続く、客も黙つて見守り続ける。

そんな日常が、穏やかな日常が、俺達を包んでいた。

この時、俺は気付くべきだった。

穏やかな日常を切り裂く一角に、生暖かい中の一つの冷たい視線に。でも俺は仕事中以外は普通の高校生で、水野は普通の女子高生だった。

だから・・・迫り来るものに全然気付けなかつたんだ。

3話（前書き）

主人公の一人称だけは初めてなので難しいです・・・

現在5時48分、おそらく最後と思われる買い物が終わった。

といふか最後であつてくれ、俺の腕はそろそろ限界だ。

弱味泥棒なんてやつてたら筋力がつくと思うだろうがそんなことは全然無く、身についたのはコソコソ隠れる方法だけである。筋肉とか鍛えたいんなら真面目に部活することをオススメするね、俺は。

「やほ～！終了～！」

どきどきと、そんな擬音がベストマッチな感じに俺の腕に荷物が載せられる。

この擬音からも分かるだろうが、俺の腕はとっくに容量を超えて、荷物の上に荷物の三段重ね、今年の鏡餅は俺ですか？

「み・・・水野・・・・頼む・・・・3分の1・・・いやせめて5分の1・・・」

「持てる男は辛いねえ

「もてるが・・・・・違つ・・・・」

「アハハ！ そーんな隆也が大好きです」

不覚にもちょっとバランスを崩してしまった、冗談でもそんなことをいきなり言うのはやめて欲しい。

「む、その程度の荷物でよろけるなんて荷物持ち大臣の名が泣く

ぞお？

それとも何？「大好き」で動搖した？私のこと好き？」

「そんな大臣になつた覚えは無いし、好きでもない、毎日この扱いで好意をもてたら被虐嗜好としか思えん」

そんな俺は軽く被虐嗜好のかもしない、「一〇一〇」してゐる水野を見るところの扱いも納得してしまつてゐる。

「好きじゃないと？」の才色兼備文武両道完璧超人の私に一欠片の好意も持たないと？」

「才色兼備と武道は認める、でもそれは性格に触れてないし前回のテストだつて・・・・・・・・・「てい」

「ぐぼあー！」

最早定番の脛キック、武藏坊弁慶さんの気持ちが理解できるぜ。荷物を持っているのでうずくまる事もできずにその場で立ち竦む俺、それを見てけらけら笑う水野。

「あ、「才色は認める」って事はもしかして顔とかタイプ？」

「田の前に落ちてたら拾つぐらいにはな、ていうかそんなこと聞くな」

「へへへえ」

笑うな、本格的に惚れたらビシしてくれる。

「おーい、いひやつこてる暇があつたら速くーーー。」

遠くから声が聞こえた、あれは

「やつほー、オカソ」

「母上様、もしくはマリーと呼びなさい」

「包帯男のマリー」

やり取りの後、水野が水野（母）に腕を捻られていた、あれが母親ならあの娘も納得できるなあ。

「む、吉田君。何か失礼な事考えてなかつた？」

「いえいえ、全然まつたくこれっぽっちも」

くそ、感知能力まで母親譲りか。

「まあ、荷物載せなさい」

水野（母）は毎回荷物を取りに車でここまで来てくれるのだ、さすがにこれを持つたまま電車には乗れないし第一俺の腕がもたん、千切れる。

俺たちも車に乗つて帰ればいいと思つのが普通だつが、どこでも峠の走り屋レベルのドライビングテクを見せてくるので、とても怖い、現に一回死にかけた。

「ぶはあ～・・・」

「あつせはは、あつわん…」

荷物を降ろした俺を指差して再び水野が笑う、だからてめえのせい
だつて言つてんだろコンチクショ。笑いながら水野は車に つてあれ？

「おーうれしいねえ、華。今日は乗つてくれるのかい」

「今日は言つて争つて長くて疲れちゃつてね、頼みますわ、母上様！」

「おい、俺は 「

「隆也は電車でいいよん。あ、はいこれ

水野は車に乗り込む瞬間、俺の手に紙を握らせた。
開くと中には走り書きで「う書かれてある。

『明日もテーーーー学校終わつてから…』

「・・・・・あー、嵌められたー・・・・」

夜の厄介事も昼の厄介事も一日連続が続くです」と、今回は金の
心配ないんだけどや。

でもまあ、それよりもお誘いがあつて嬉しいと思つてしまつた方が
厄介だ。

あいつが変な事言つせいいだと、自分に納得させて帰路に着いた。

* * * * *

「で、何だ。俺はお前の機嫌でも損ねたか？それともまた気分か？」

現時刻は午後11時半、ギリギリ日付の変わつていなこといつ時間まで、1時間も振り回したのは「いつ」だ。

「仕方ない事だ。ま、話すからあがれ

今日のデータ、もとい荷物持ちから帰つた俺の携帯に着信アリ。
それはもちろんこいつからで内容は

『いつもの場所、いつもの時間、ベンチの下』

と書かれていて、公園に行くべビンチの下に置き紙があつたというわけだ。

それから俺はRPGよろしくヒントを参考に町内を駆けずり回つて、そして今、とっても大きいマンションの前に立つ立つていてる。といふと、じつは好意に由えてマンションに入った。

隆也：コマンション最上階。

やべえ、このマンション自体高そうだけどしかも最上階…？
こいつこいつも俺との取り分岐うじてるんだ！？

「まあ、座れ

ううたえている俺をよみ田に着席を勧めてくるこいつ。

さて、ここでは吉田 隆也の内装解説のお時間です。

んー、何か警察に見つかると危なそうな物や雑貨、機械類で足の踏み場がありませんね~、ソファーもベッドも、椅子一つありません！

はい、アホクサイ説明終了、結論としてはビリにも座れません。

「ん？ どうした、早く座れ」

こいつは散乱していた物を手早くどこかして座る、それ適当に扱つていいのかよ・・・。
とはいえ俺も倣う、ずっと立つて居るなんて[冗談]じゃない。

「で、何の用？正直仕事以外じゃ会いたくないんだけど」

「ああ、とりあえず食らえ」

ガニッ、と小気味良い音がした、俺の頭がスパナで叩かれた音だ。

「いつてえー何すんだコンチクシヨー」

「お仕置きだ、仕事失敗のな」

「はあ？ ちゃんと仕掛けてきただろ？が！？」

「馬鹿が、お前は。見つかる所に「置いて」来たら何の意味も無いんだよ」

つまり、盗聴器とカメラが見つかってことか。

「まあ、気に病むな。失敗は誰にでもあるぞ」

「Jやつ、ゴン、ズサ

「いつが俺のポケットを探つて何か硬いものを投入した、なかなか重い。」

触覚で確認する、大まかに言つと/orの字型だ。

多分味覚でも嗅覚でも分からないので視覚で確認する。

黒光りして引き金がある男なら一度は憧れるこれは

「拳銃！？」

「自衛隊の御用達だ、性能は保証する」

いやいや、そういう意味ではなくてですね、第一あなた様はこれを
どうで手に入れてらっしゃたんでござりますか！？

「な、な、な、なんでこんな物！？」

「見つかつたとなつては口封じに来る会社もあるんだ、用心しろ」

『いつから日本はそこまで物騒になつた』

文句を言いたいが言えない、俺はそのままの姿勢で一分近く固まつ
ていた。

3話（後書き）

「自衛隊御用達」とか書いておいて作者に軍事知識はほぼあります
ん（笑）
これから妙な描写が出たりするかも知れませんがそのときはすいません。

「はあ～・・・」

深い、溜息。

溜息すると幸せが逃げる？元からねえよ、そんなもの。

「よつ、隆也」

「ふはあ～・・・」

「おーおー、無視するなよ」

さて、気さくな友人Aは無視することに決めて今日のことを考える。

この、腰の重い感触と共に。

しばらくは人目につかないところには絶対行くなよ、いいな？

頭には「あいつ」の言葉が木霊している。

幸い今は若者の楽園、学校であり不審者など入り込む余地は無い。帰宅時も、それほど時間がすれなければ俺の家は人通りの多い地域だ。

借りているマンションは住宅地の近くにあるので睡眠時もおさらく大丈夫だろう、おさらく。

・・・・いや、この冷たい現代社会、もしかすると隣で銃声が響いても無視決め込む人間が居るかも知れない。

「おー」

田の前で滂沱と涙を流そうとしている友人Aに、今日始めて話しかける。

「おお！最早交友関係を切られたのかと思つて本気で悲しんだじゃ
あないか！」

「まだHームルームRも始まつてないだろ？が。で、頼みたい事があるんだけ
ど」

「おう！金と女と勉強と面倒くさい事と不利益な事以外は全部相談
に乗るぞ！」

「今日泊めてくれ」

「ジックリも無しかよ。それに俺ん家は無理だぜ」

「どうして？」

「母親がつるやこの嫌いだから」

ここの母には一度だけ会つたことがある、ものすごく怖い、睨ん
ただけで子猫くらいなら殺せそうな女性だった。
やめておこう、命の危険を増やすような真似は。

「あー、やめとくわ。俺も命が惜しい」

「だらう？へ。第一お前、彼女の家泊めてもうれば一挙解決じゃねえ
か」

ブツー！

吹いた、何も飲んでねえけど睡だけ吹いた。

「うつわ！ きちゃねえなあ、もお！ ピーッた、お前実は純情か！？」

「それ以前に彼女って誰だ！」

「は？ 水野に決まつてんだろ？ あのくつつき加減はそつとしか・
・・・・」

違う！ あれはおじりされてるだけだ！、と叫びたかったがぐっと堪える。

こいつは数少ない良心の一人だが金持ちの噂が広まるといまい、命の危険がさらりに増える。

「水野とは・・・・違うよ」

からうじて、それだけ声を振り絞つた。

でも、どうしてか心が痛んで
でも、どうしてか少し気分が悪くて
でも、どうしてか突き放された気分になつて

「ほほお？ ジャあフられたか？ 可哀想な隆也には俺がカラオケに付き合つてやうづか？」

「フ、ひれてねえよ、告白してねえんだから」

「じゃあ、好むあるじとは何[足]しないこと？」

「ンなわけ……」

セリハまで言つて、自分でも思いがけず唇の動きが止まる。

「…………ねえ…………だろ…………」

かろひじて声を絞り出すが、それはとても不自然で、それはとても格好悪く止まつてて。

前を見ると友人Aが一いやーいやしてじゅうを見ていた。

「じゃ、告白はないだけ、って事でいいんだな？」

「いいわけあるか」

「これは否定できた、でも

「嫌い」だといつ事を声に出す事が、こんなにも恐ろしいことは思わなかつた。

「好き」だといつ事を声に出す事が、全然出来ない俺なの。

ん、何考えてんだ、俺は。

どうして俺が好きななんていう必要があるんだ、あいつにとつて俺は金蔓程度でしかないはずなの。^{かなげ}元の、好意を告げても無駄……

つてまた何考えてんだ、昨日あいつが変な事言つからりこんな事になるんだ。

「とにかく、俺は、あいつの事……」

そこでもまた止まつてしまつ、唇が動かない。

「ま、そろそろ人も多くなつてくれるし」のぐらいで勘弁してやるよ

遊んでやがつたのか、野郎め。

いつか復讐してやる、今度にでもからかつてやる。

「はあ～・・・・・」

溜息が一つ増えた。

今日はあいつの顔を見て、平静を保てるか分からなかつた。

* * * * * * * * * * * * * * * *

一時限目、今日は水野遅いな、まあこんなのはよくあることだ。

二時限目、あつはつは、水野はお寝坊さんだなあ。

三時限目、もしかしてサボりかよ、ちょっと休憩時間に欠席理由調べてみようかな。

四時限目、学校に連絡してない？　あいつ、サボる時でも連絡入れるのに・・・

今日の授業中はこんなことばかり考えていた。

昼休憩、俺は一人ヤキソバパンをかじる。

(サボつてないなら事故？　それでも病院から連絡くるよなあ、まだ寝てるとかか？　・・・　いくらなんでもそれは無いだろ)

いつも食べている物なのに、美味くない。

だから紛らわすために、考えることばかりを繰り返した。

考えて、考えて、考えて、考えて、考えて考えて考えて……。

考へても無駄ということしか思いつけなかつた、どうせ俺は文明の利器も使いこなせないただの馬鹿だよ。馬鹿だから直接確かめないと納得いかないんだよ、本当に大馬鹿さ、笑うなら酸素ボンベ用意してからにしな。

「どー行くんだよ、隆也」

いつも通り陽気な声で、朝と同じ友人Aが教室を出ようとする俺に声をかけた。

「ちょっと早退、胸クソ悪い」

「へー、へー、先生様には俺がよろしく伝えておきますよ

友人Aはそう言って、俺に近づいてきた。

「なんだよ? もう早退するって……」「家にはいないぞ、確認したからな」

奴の手には携帯電話、表示された件名は『水野自宅』

「お前……。」

「ま、あいつとは同じ陸上部のよしみつて奴だ、ケータイの方は知らないから後は自分で探せよ?」

「あ、ありがとう」

「いこって事よ、俺達友達」

「こやかにそう言って、拳を突き出してくる友人A。
軽く拳をあわせて教室から出る。

「じゃあ、後頼むわ。ジュン」

最後に渾名^{あだな}で呼んでやった、あいつは後ろで滂沱と涙を流している
事だろう。

5話（前書き）

今回から離れた話になります、色々シナリオが変わっています
すがそこは物語といつも同じです。

俺は、走る。

どこに向かつてなのか分からぬ、ビニを探していいのか分からぬい。

ただ、探していないと落ち着かなかつた、後ろからずつと急かされているような気分になる。

「ハア、はあ、はあ、はあ・・・・・・」

商店街を探した、公園やゲーセン、食料品店まで探した。だが、どこにも居ない。

脇腹が痛い、肺が割れそうで最早、足に感覚は無い。それでもずっと走り続けた。

どうしてだか分からぬいけど、今日会わなければもう会えないような気がした。
だから、走り続けた。

気付けば俺は「あいつ」のマンションの前に立つていた。

「はあ、はあ、せつだ・・・・・あいつに頼めば・・・・・

前に聞いた話によると、オートロックがどうとかで入れないらしいので、携帯で連絡する。

『はい・・・俺だ!』

『ああ・・・・・そっちから連絡するなんて珍しいな、ビリした?』

良かった、お互い名前を知らないので分からなかつたらどうしようかと思っていた所だ、ってメールの存在忘れてた、俺の鴉鹿。

「お前人脈広いんだろ? 人探し頼めるか?」

『良いには良いが・・・誰だ?』

「同級生だ、不自然な欠席だつたんできょと心配になつて・・・・・・」

『ー・・・・・わかつた、今から家に来い、ロックは開けておく』

そして俺は、再びあの危険な部屋へ立ち入つた。

* * * * *

部屋に上ると今回は少しだけ片付いており、飲み物も出してくれた(水だが)。

「水野 華つて名前だ、探せるか?」

俺が問うと、こつは少し逡巡してから言った。

「そいつは・・・・多分誘拐だ」

「はあ!?」

思わず田の前にあつた水のコップを倒しそうになつた。

「すまない……会社あつかいがそこまで下卑た連中だと……」

「こやこやこや、待てよ……。日本だぜ……。そんなもんお前警察とか……」

すがるよみづな声で俺は叫ぶ。

「金の便利さを、お前はどうまで知つてこる」

「…………でもわ、あこつせりわれる理由とか……」

「だから下卑た、と言つただろ。お前は警戒してゐ周りからつて」とだよ

「なんだよ、それ……？」

今度こそ「ロップを倒した、床が濡れるがどうでもいい。

「いやこいつ事にはならぬよ。元気を呪つてこたが……すまん……」

「すまんってなんだよー? お前のせいなのかよー?」

「見つかったのはお前だが、あの会社を選んでしまったのは俺だ、すまん」

「くわつー。」

手近に倒す物がないので床を叩く。

「謝るんなら…………手伝えよ…………あいつを助けるの……手伝え!」

「助ける、か。よしつ、作戦立てるが」

少し冷静さを取り戻した俺は、勝手に冷蔵庫を空けて勝手に水をコップに注ぐ。

「身元は割れているよつだが……目に付いたらやばい事をしたいんだろつな」

水を飲む、頭が冷えてくる。

「具体的には?」

「無料で情報を取り戻す、だったら良いやが…………最悪、口封じもありえる。いつもは渡すだけで信じるか妥協せざるを得ない状況だったが……今回は向こうが優先権を握っている」

「そつか……」

コップを台所へ戻す。

「一応銃器は一通り揃っているが…………俺は専門じゃないしお前も素人だろ?」

「ああ、正面から行つても「助ける」は無理つことか。…………取引、するしかないのか」

「助けなきや駄目だ、返すにしても殺すにしても手間は五分五分、50%に賭けて死にたいか?」

「じゃあ、何があるのかよ?」

「正面からじゃなくて抜け道から行けばいい、俺も出来るだけ手を打つ」

「そつちだつたら確率は?」

「五分五分、何があるか分からんからな。だがこつちなら一人とも大丈夫だ」

「・・・・・分かつた」

コップを冷水で洗いながらいつもの仕事のよつこ、自然体でやり取りする。

急速に頭が冷える。

これは自分の責任だ、だから自分が助け出さなければならぬ。

「警察関係は?」

「その場にいる可能性はまず無い、向こうも一応言ひ訳が欲しいからな。」

後で捕まる事は気にしなくても大丈夫だ、きつらんと根回しをしてお

く

「ん、サンキュー」

「決行は今日の夜、それまでに出来る限りのことはやっておく。お

前は寝てくれ

「あこや」

夜、走り回って消費した体力をそれまでに回復させなければならぬ。
辺りに散らばった物をどけ、俺は眠りについた。

服装確認、癖の無いただの黒Tシャツ、つまりは闇夜に溶け込み動きやすいって事。

下はこれも少し黒め、腰には借りている拳銃を下げている。
その他はピッキングツールなど一通り、役に立つかは分からないうが軽いので邪魔にならない。

すこし短めの染めていない髪に、少し引きつった顔の男が鏡に映る。
俺だ、正直緊張している。

頭は冷えているがどうしても体がついていかない。

「大丈夫か？」

「大丈夫だ！」

あいつに言われて、つい強く言い返してしまった。

いかんいかん、平常心を保つんだ。

ここはあいつの部屋、作戦会議後眠つてからおよそ3時間、現時刻9時。

闇も濃くなってきたしそろそろ時間だと思い、俺は着替えて忍び込む準備をしている。

「そうだ、一つ聞きたい事があつたんだがな」

あいつが話しかけてくる、向こうつも仕込みは終わったようだ。

「なんだ？」

聞きながら水を一杯。

「やいつはお前の恋人か？」

ブツー！

盛大に水を吹いた。

なんなんだ、みんなはそんなに俺と水野をくつつけたいのか？

「ゲホ、ゲホ！ どうして、そういう話になるんだよ。」

「どうしてと言われてもな、なんとなくだ」

「あいつは違うよ、俺の弱み握っていて、付き纏つていつつもおいらせる奴。

俺に気なんて全然ないっての」

「へえ、でも弱み握ってるならそれを金だけ盗ればいいんじゃないか？俺たちみたいにな」

「……え？」

今まで考へてもいなかつた事があいつの口から発せられる。

「付き纏つてことは一緒に居ても不快じゃないってことだら、助けたら面白でもしてみるか？」

「ヤニヤ笑いながら」こいつが言つ。

「そうこええばそうだ、

どうしてあいつは俺に付き纏うのだろう？好意までとはいかなくて

も俺と一緒に居て楽しい?じゃあもしかしたらチャンスも……ってまたか、どうしてちょっと前からこんな風になつてるんだ俺の頭は。

「俺がごめんだつづーの。あんなのと付合つてたら金欠になつていつか死ぬ

「その割には今の言葉を聞いて嬉しそうだつたが?」

「な、な・・・・・」

思考停止、思考停止。

「んなことねえよー。」

脳が正常に戻つて、やつと言葉を発する。

「ははっ、まあ、からかいすぎた。すまん」

「こつもか、世の中の人間俺をからかう時だけ同じ脳みそになつてゐんじやないだろつか。

「まあでも、始めに何を言つかぐらう考えて置けよ」

「?」

「馬鹿が、お前は。へんな奴らに捕まつて、それで助けに来たのがいつも尻に敷いてる男だぞ? そりゃ驚くだろ?」

「(1)まかすにしても、教えるにしても、かあ

「ハア、と俺は溜息をつく。

そう言わればそうだ、助けられて事後処理が完全だとしても本人の記憶まではどうにもならない。

最悪の状況、トラウマになつて家から出れなくなつたりなどもあるかも知れないのだ。

そうならないために、かける言葉は選ばなければならない。

なんにしても、面倒くさい状況だといつ事だ。

* * * * *

もう一度服装を確認、良し。

「オイ、ここからで良いんだな？」

『ああ、そこは手薄にしてある』

前に忍び込んだビルの裏口の一つに、俺はいる。

今はケータイで会話しているあいづは、じつやけん備の一部を買収したらしい。

交渉するときだろうが強行突破を選ぼうが、とりあえず捕まつていないうが有利に進められると言うのが理由だ。

進入時に別の場所に居てくれるだけで、見つければ容赦はない、という条件だから油断できないが。

『そろそろ切るぞ、声で気付かれてハイ終わり、なんて洒落にならん』

「ああ、じゃあな」

ピッ、と音が鳴り通話終了、そして電源も切る。

頭を冷やせ、四肢の動きを確認し、指の先まできちんと動くか、よし、今からは「仕事」だ。

俺は、裏口の戸の鍵を軽く針金でいじり、開錠した。そしてそのままぐるりと中へ、足跡など残さない。こじ開けた後は分かるだろうが知った時は後の祭りだ。

腰の拳銃に一度触れ、最早慣れ親しんだ闇の中を歩いていった・・・

そこには意外すぎるほど簡単にたどり着けた。社長室、その場所を一番たどり着き難くするとはどれだけ警戒しているか窺える。

その部屋の中心に転がされているのは

(水野・・・・・)

知らずに奥歯を噛み締める。

ここから見た限りでは外傷などはまったく無いが、注射など色々な傷害手段がある以上、安心できない。

さて、ここまでなら今すぐにでも駆け出したいところだが、俺の説明ではこの部屋にあるものが一つ、欠けている。

長身の、男。

おそらくはこの社長が雇つた特殊な職業の人だろう。警備員などには無い、一種の追い詰められた感じがある。

失敗してはならないと、失敗する状況を常に想定できる、プロの貫

禄だ。

あいつに見つかれば、俺はどうなるかわからない。

いや、俺みたいな一般高校生はすぐに組み伏せられるだろう。

それでもやらないではならない、交渉はどうじょうもなくなつた時の最後の手段だ。

一度水野の居る場所にたどり着ければ何とかなるかもしれない。あいつらも人目に付く所までは追つてこれないだろう、たとえ今は俺が犯罪者でもこつちは向こうの犯罪の証拠を持っているのだ、痛み分けにしてはこつちに分が勝ちすぎる。

そう考へ、俺は気配を消して水野に近づきだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8168c/>

この世界で引き金を引いた

2010年10月19日03時04分発行